

町づくり研究所 2023 年度までの活動より

曾我部昌史* 内田青蔵* 山家京子* 中井邦夫* 六角美瑠* 上野正也** 須崎文代** 吉岡寛之***

鈴木成也**** 石田敏明***** 重村力***** 丸山美紀***** 長谷川明***** 石田和久*****

Report from the Activities of Town Planning Institute until 2023

Masashi SOGABE* Seizo UCHIDA* Kyoko YAMAGA* Kunio NAKAI* Miru Rokkaku* Fumiyo SUZAKI**
Masaya Ueno** Hiroyuki YOSHIOKA*** Naruya SUZUKI**** Toshiaki ISHIDA***** Tsutomu SHIGEMURA*****
Miki MARUYAMA***** Akira HASEGAWA***** Waku ISHIDA*****

1. 工学研究所 町づくり研究所での活動

町づくり研究所を工学研究所のプロジェクト研究としてはじめてのは、2006 年度からである。それから 18 年間にわたり、活動の幅を広げながら継続をしてきた。日本各地の地方都市でのまちづくり活動、横浜市内各地での地域活性化に資する活動など、地域住民や関係団体などと協働しながら、地域の歴史や資産を活かした活動を展開してきた。2022 年度の建築学部設立にともない 2023 年度には建築学研究所が立ち上げられ、2024 年度からは建築学研究所内にプロジェクト研究を立ち上げられることになった。研究活動の性格上、町づくり研究所を建築学研究所内に移すことになったため（「まちづくり研究所」に改名）、工学研究所での活動報告は今回が最後となる。

2. ここ数年の各所員の活動内容

町づくり研究所の所員の活動は、相互に関係性をもちながらも多様である。工学研究所での活動報告を締めくくりにあたり、ここでは、各所員の最近の活動を簡単に紹介したい。

*教 授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Arch., Fac. of Arch. & Bldg. Eng.

**准教授 建築学部建築学科

Associate Professor, Dept. of Arch., Fac. of Arch. & Bldg. Eng.

***特別助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Arch., Fac. of Arch. & Bldg. Eng.

****特別助手 建築学部建築学科

Research Associate, Dept. of Arch., Fac. of Arch. & Bldg. Eng.

*****客員教授 工学研究所

Guest Professor, Research Institute for Engineering

*****客員研究員 工学研究所

Guest Research Fellow, Research Institute for Engineering

*****特別研究員 工学研究所

Research Fellow, Research Institute for Engineering

重村力は、住宅総合研究財団研究助成でまとめた「災害時に大きな減災機能を果たす集落のコモンズ空間の研究」において、主に大船渡市越喜来崎浜集落の調査研究を元に、集落のコモンズ空間やコモンズ組織の減災機能について論述した。そのほか、障がい者共同居住施設「エンジュの家」（南相馬市）や、「邑景居」（横浜市）の設計をまとめた（いずれも、いづれも、いづれも設計集団と共同）。「邑景居」は、幕末の伝統民家の長屋門の古材を活用した保全再構成をとまう計画である。

石田敏明は、本学 31 号館（建築ものづくり工房）にて自身の作品を振り返る展覧会を行った（2023.07.21-2023.08.21）。建築設計手法を時系列で、写真、図版、スケッチ、模型、映像などのメディアを通して紹介した。また「まちデザインゼミ」（総合資格学院出版・共著）では、「シェアフラット馬場川」（前橋）によるまちづくり活性化の仕組みとその波及効果について論述した。そのほか、講演会（自身の建築に関するものや、欧州の広場と日本の道を比較検討するものなど）や建築設計も多く行った。

内田青蔵は、来年度から「まちづくり研究所」の所員となる姜明采とともに、北軽井沢の大学村の調査を行っている。戦前期にひとつの理想郷として開発された住宅地であり、現在は開発当時の別荘建築（山荘）の悉皆調査をしている。遺構をもとに、今後その魅力を生かしつつどのような別荘地として発展させていくべきかを模索する予定である。



図1 Park Line 870 竣工写真

山家京子と上野正也は、神奈川県下のいくつかの場所で共同して検討にあたっている。「京急・八丁駅駅前空地利活用」では、実験的な利用を通じて、当該地区における潜在的なニーズを探り、活用の方向性を検討した。その上で、広場整備に至っている。ストリートファニチャーの制作・設置なども行った（図1）。「横浜市・持続可能な郊外住宅地まちづくり」では、十日市場駅周辺地区と栄区湘南桂台地区を対象に、地域の持続可能性に資する活動や調査研究を進めている。「鎌倉市・小町通り商店街景観まちづくり」では、小町通り商店会や鎌倉市と協働し、に関する意見交換ワークショップ、景観形成を意図した学生による設計提案を行った。（図2）。また、景観形成ガイドラインを補完するツールとして、シーン集を作成した。今後、シーン集の展示や冊子の配布をする予定である。



図2 鎌倉市・小町通り商店街景観まちづくりワークショップ

中井邦夫と鈴木成也は、富山県魚津市において、魚津中央通り防火建築帯の再生活用計画を継続して進めており、また、魚津市本江地域交流センターの基本設計協力を行った（設計監理：建築科学研究所）。横浜の防火帯建築や全国の防災建築街区に関する調査研究では、石引商店街や住吉町三丁目防火帯建築群の冊子化などを行ったほか、R.Moneoの「類型学について」の和訳を冊子化した。

六角美瑠は、六角橋商店街内にできたロッカクパッチにて、「ロッカクと継承」と題し、研究室での活動内容を展示で紹介し、「六角橋と継承」をテーマにシンポジウムを開催した（図3）。宮城県大崎市岩出山町では、継続的に活動を行っており、今年度は岩出山町のまち調査（五感をテーマとしたリサーチ）を行い、町民や行政関係者などが参加する報告会の開催などを行った。また、横須賀美術館で行われている「Koyart2023」に参加し、三浦半島の活性化を目指した野菜の販売小屋「新嘗興」を製作し、三浦市の農家の野菜を販売した（図4）。



図3 「ロッカクと継承」展 展示風景



図4 新嘗興 三浦大根の豊作を祝う

須崎文代は、北海道ニセコ町におけるSDGs街区を中心としたエコロジーな生活構造と環境のデザインを検討する研究会「ニセコ都市未来研究会」や、千葉県鴨川市釜沼における里山と棚田の再生、古民家再生、事物連関に着目した生活デザインについての実践的な活動である「小さな地球プロジェクト」に参加し（図5）、さまざまな研究活動を推進している。平行して、旧渡辺甚吉邸の移築保存計画、ブラジル日本人移民住宅の保存活用に関する調査研究、民家再生に関する調査研究（千葉県南房総市、長野県木曽郡開田村）など、歴史的建造物の保存再生の活動を幅広く進めている。また、都市および生活環境の近代化に関する研究を行っている。



図5 里山再生と小屋づくりのスタディの様子

曾我部昌史、丸山美紀、吉岡寛之、長谷川明は、徳島県美波町にて、日和佐港湾地区におけるにぎわい創出のための種々の検討や、門前町通り活性化に向けた活動を継続して進めている。その他、長谷川は当地での民泊運営や土産物開発など、幅広く展開している。また、コロナ禍で数年休止していた今治市大三島での活動を再開した。関東学院大学柳澤潤研究室と協働し、大山祇神社の参道活性化に向けた検討を進め、伊東豊雄建築ミュージアムにて「みんなの参道物語」の展示として紹介した（図6）。



図6 「みんなの参道物語」地元高校生らとのワークショップ